

第三回 全統高一模試問題

國語 (八〇分)

二〇一二年十一月実施

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は、25ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。（受験届・解答用紙）冊子表紙の注意事項を熟読すること。）
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、解答選択型は、二通りある。①②③は共通問題、④⑤は選択問題である。④と⑤のうち、どちらか一題を選択して解答すること。（選択パターン以外で解答した場合は、解答のすべてを無効とする場合がある。）

選択型 コード	選 択 型	問題番号
1	現代文・古文・漢文型	二 三 四
2	現代文・古文型	一 二 三 五

- 五、試験開始の合図で「受験届・解答用紙・冊子の国語の解答用紙を切り離し、所定欄に選択型、氏名（漢字及びフリガナ）
在学高校名、クラス名、出席番号、受験番号（受験票発行の場合のみ）を明確に記入すること。
- 六、試験終了の合図で右記五、の の箇所を再度確認すること。
- 七、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

「学ぶ」ことの内容はほとんど無限である。そうした中で唯一^{ただ}一つ確かなことがある。それは「学ぶ」側がその気にならなければ、「学ぶ」側にそれなりの視線がなければ、話は始まらないということである。福沢^{ふくざ}の徳義論は「他人の伝習を要せず、一心の工夫を以て瞬間に行^{もつ}うべし」と言われているように、「学ぶ人の心の工夫」が外からの教育よりも大きな役割を果たすことを強調している。さらに、「学ぶ人の心の工夫」がどのようにすれば促されるかについても、誰かや何かに出会うといった偶然の要素を考えるまでもなく、あらかじめ定められたコースがあるわけではない。これに対して智恵・知識を「学ぶ」ということであれば、それなりの手順が外形的に整備され、それなりに準備段階を踏むことも可能になる。学校制度の提供するカリキュラムはその最たるものであるが、それをも包含するものとして「学ぶ」側の置かれた歴史的・精神的位置というものはきわめて重い。単純に言えば、同じ時代を生きた人々は同じようなことを「学ぶ」ことを通して、似たような物の見方をし、似たような判断を下すというマジ^aレもない現実を否定することはできない。

¹ 私の世代は一九六〇年代はじめに大学生活を送った世代であるが、この世代が提供された知識の本身は圧倒的にマルクス主義、社会主義に連なるものが多かった。すでに社会主義体制の精神的権威に黄色信号、赤信号がテントウ^bしつつある時代であっても、大学に入ると学生たちはとりあえずマルクス・エンゲルスの短いものを読むといった具合であった。「雪解け」が言われていたにもかかわらず、世界を支配していたのは冷戦であり、政治はもっぱらイデオロギー^cによって分析され、語られていた。私の世代やそれに先立つ世代を含め、政治学の領域で政治思想史を研究する人間が多かったのは当時の「イデオロギー政治」の直接・間接の影響ではなかったかと思われる。また、冷戦が西洋思想の内部対立に起因するものであるという点からして、政治の重い現実を解く鍵を求めて西洋政治思想の専攻者が増えたのかもしれない。

人間が歴史的・社会的存在であることから、「学ぶ」内容がある程度「与えられる」ことは避けられない。しかしながら、そ

のことを宿命と考える必要はない。それは所詮^{しよせん}一つの出発点でしかなく、その先にはさまざまな選択と選別、「学ぶ」側の判断の余地が潜^{ひそ}んでいる。入口は一つのように見えても、出口はさまざまであり得る。長く生きるということは自ら「与えられたもの」を相対化する時間が増えることでもある。このように学校制度の中でカリキュラムに従って「勉強」し、試験を受けるといったシステムを卒業すると、何を「学ぶ」のかという問題は「学ぶ」側に跳ね返ってくる。「学ぶ」という行為には「学ぶ」側の目線が伴っており、したがって、何を「学ぶ」のかという課題の自覚化とそのあり方が問われることになる。これまで知らなかったことを知る——外の人々が知らなかったことを知る——ことの快感を追求するところから、何かテーマを念頭にやや持続的に何かを「学ぶ」といった態度もあるし、さらには自らの内面的な不安や疑念を解消する手がかりを求めて「学ぶ」こともまた、きわめて人間らしい所為^{しよゐ}である。このように「学ぶ」という行為には知的な個性がコクイン^{こくいん}されており、ここにこそ「学ぶ」ということの喜びと楽しみがある。

ところが個性的に「学ぶ」というのはなかなかその現実味があまり感じられないかもしれない。それというのも、何を「学ぶ」か、どう「学ぶ」かを含め、「学ぶ」べきことはあらかじめ社会的に共有され、「学ぶ」といってもその情報の大波の中を漂っているのが実情だからである。学校制度の次には社会的な「常識」が待ち構えている。もちろん社会的に共有された情報や知識は一種の加工品であり、作成した人々の関心や偏り、さらには利害も少なからず流入している。事実についての情報にしても、「事実についての情報とされているもの」でしかない。このことは「学ぶ」ことが事実上その社会の共有された色眼鏡^{めがね}をかけて物事を視^みることに近いということに他ならない。事実が無数にあり、いちいち精査している時間とコストが「学ぶ」側にないとすれば、出来合いの色眼鏡で整理された図柄を「学ぶ」ことに事実上ならざるを得ない。その上、馴^なれた図柄はコストの節約になるばかりでなく、心理的に安心感があり、時には快感を与え、それだけになかなか変わり難いことになる。極論すれば、「見たいものを見る」ことになっていく可能性がある。

こうした色眼鏡をかつてリップマンというアメリカの有名なジャーナリストは「ステレオタイプ^{ステレオタイプ}」と呼んだ。そこでは「見たいものを見る」といった具合に人間は「社会化」されてしまう。新聞はこの「見たいものを見せる」ことで商売をしている

のであって、「ステレオタイプ」に対する防衛策にはならないのみならず、それをむしろ補強する役割を果たしていると彼は主張した。つまり、新聞を読みながら「学ぶ」ことにはその種の危うさがつきまとうというのである。現代のソーシャルメディアに見られるのも、非常に均質的な意見を持つ人々が互いに求め合うという現実である。この「見たいものを見る」というのは選択的接触と呼ばれるが、かつての「ステレオタイプ」の再現とも言えよう。

プラトン以来、哲学者たちが試みてきたのは、こうした「ステレオタイプ」(俗論や世論)の支配を突き破って「真の現実」へと人々を導く可能性を説得することにあつた。リップマンがゲンキウしたプラトンの『ポリテイア』の有名な「洞窟の比喩」によれば、多くの人々は鎖につながれたまま、洞窟に映る影を「真の現実」だと思い込んで生きている。ところがある人が自らをこの鎖から解き放ち、洞窟の外に出て太陽を目にし、「真の現実」を視野に入れる。哲学者はまさにこの洞窟から外に出て「真の現実」を目の当たりにした人間に他ならない。

しかも、大事なことは「真の現実」を全体として見る境地に達することができるという点であつた。つまりそれは、究極的な視点が唯一つあるということであり、そこに至る「学ぶ」という行為は、何よりもまず「ステレオタイプ」から自由になることを前提にしていた。「真の現実」に到達するということは「すべてが視える」という境地に達することであり、それ以上は知的探求の場は存在しない。その意味で絶対的な境地である(ある時期以降、哲学者たちはこうした境地が存在しないことをもっぱら主張するようになったが、このことはここでは立ち入らない)。

私がここで「学ぶ」こととして念頭に置いているのは、「ステレオタイプ」にマイボツすることなく、いくらからでもそれから自由になる知的な空間を追求することであり、必ずしもこうした絶対的な境地に到達することを目標にするものではない。「ステレオタイプ」依存型に物事を「学ぶ」ということは、自ら「学ぶ」ことについて格別の説明も弁明も必要がないように思い込む態度に近いであろう。

「ステレオタイプ」も絶対的境地も目標にしないという道を選んだ場合、「何を学ぶか」について自ら自覚し、必要に応じて説明する準備が求められる。この自覚や説明は少なからず個性的であることを免れない。同時にその魅力はあくまでも個人と

しての視点にこだわり、自分の人生と重ね合わせながら「学ぶ」ことを追求するという点にある。それは徳義に関連して福沢が人間は自分の心の働きすらわからないと述べたような自分と付き合うことである。当然、ここでは「学ぶ」ことには「わからないこと」が付きまとう。それを自覚することもまた、「学ぶ」ことの大前提になる。

(佐々木 毅^{たけし}『学ぶとはどういうことか』)

(注) ○ 福沢……福沢諭吉(一八三四～一九〇二)。幕末から明治にかけて活躍した思想家・教育家。

○ マルクス……ドイツの経済学者・哲学者(一八一八～一八八三)。二〇世紀の社会主義思想に大きな影響を与えた。エンゲルスはその協力者。

○ イデオロギー……思想。思想傾向。

○ ステレオタイプ……決まりきったやり方。紋切型^{もんきりがた}。

○ ソーシャルメディア……インターネット技術を利用して個人間のコミュニケーションを促進するサービスの総称。

○ プラトン……古代ギリシャの哲学者(前四二七～前三四七)。

問一 傍線部a～eのカタカナを漢字に改めよ(楷書で正確に書くこと)。

問二 傍線部1「私の世代は一九六〇年代はじめに大学生活を送った世代である」とあるが、ここで筆者が自身の大学生活について述べているのは、どのようなことを言いたかったからか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア マルクス主義や社会主義を学んだことが、その後の自分のあり方を決定づけたということ。

イ マルクス主義や社会主義への共感が、自らの学びの支えになっていったということ。

ウ 政治をもっぱらイデオロギーで分析し語ることに限界があったということ。

エ 学校制度の提供するものにはそれなりに意味があったということ。

オ 人が何を学ぶかは時代や社会に強く規定されているということ。

問三 傍線部2「入口は一つのように見えても、出口はさまざまであり得る」とあるが、ここで筆者はどういうことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 一つのことを学んだとしても、それについての解釈は人によって多様であるということ。

イ 学校制度のなかで学ぶことを卒業すると、人は社会的に共有された知識を学ぶことになるということ。

ウ 与えられた知識から出発しても、やがて学ぶことは個性的な行為へと変わっていくということ。

エ 学びはじめは誰もが同程度の知識しかもたないが、次第に知識の多寡^{たか}には差が生じていくということ。

オ 学校では知識を与えられるだけだが、後にはその知識を身につけるための時間が増えるということ。

問四 傍線部3「この『見たいものを見る』というのは選択的接触と呼ばれる」とあるが、人が「選択的接触」を求めるのはなぜか。本文に即して五十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問五 傍線部4「真の現実」とあるが、筆者はこれをどのように捉^{とら}えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 学びの目標となるものの一つではあるが、そこに到達することはきわめて難しいため、安易に求めてはならない。
イ 類型的な考え方からの脱却を前提にしているが、現代人にとって必ずしも目指す必要はないものである。

ウ 唯一の視点によっているという点では絶対的なものだが、筆者の求める絶対的な真理とは異なるものである。

エ 俗論や世論の支配を突き破ることとたどり着ける、あらゆる人々にとっての理想の境地というべきものである。

オ プラトン以来いまに至るまで、哲学者がたえず追い求めてきたものではあるが、一般の人間にはあまり関わりがない。

問六 傍線部5「洞窟に映る影」とあるが、これと同様のことを別の比喻によって表現している十五字以上二十字以内の語句が、本文中にある。その語句の最初と最後の二字を、それぞれ答えよ。

問七 筆者の主張に合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア カリキュラムに従った学習は個性的な発想をする人間を生み出すことができないため、そうした学習はさほど意味のないものだといえる。

イ 人が学ぶことの内容はほとんど無限であり、学校での学習を卒業した者は、社会生活で役立つより実践的な知識の学習へと向かわざるをえない。

ウ 人々が欲していない情報まで提供する現代のメディアとは対照的に、かつての新聞は「見たいものを見せる」ことで成り立っていた。

エ ステレオタイプを身につけることで得られるのは客観的で中立的な知識にすぎず、そこから本当の学びのもつ面白さを味わうことは難しい。

オ 学ぶことは自分を見つめることと不可分であるべきであり、そこでは容易には答えを見出せないという困難を免れることはできない。

問八 本文に題名をつけるとしたら、次のうちのどれがふさわしいか。最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア ステレオタイプの功罪

イ 個性的な発想を得るには

ウ 主体的に学ぶということ

エ 客観的情報と主観的知識

オ 学ぶことの歴史の変遷

【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

近頃は人が歳を取らなくなっていました——話していた相手がふと呟く^aようにそう言った。よく聞く言葉ではあるけれど、そしてとりあえずこちらもそうだなと頷き返し^{うなず}はしたけれど、あらためて考えてみるとその中には幾つもの問題が隠れているように思われた。

歳を取る、とは年齢が増すことだが、それはただ数字が増加することを意味するのではない。三歳の子供が六歳に達したからといって、アイツも歳を取ったな、とは誰も言わないだろう。

歳を取る、とは老齢に近づくことであり、壮年期を越えた下り坂の一年、一年を辿り^b続けることに他ならない。

では人が歳を取らなくなるとはどういうことか。時間とともに年齢が増すのは否定しようもないのだから、ここでいわれる歳とは数字で捉えられたものではなく、いわば年齢相応のイメージとでもいったものと思われる。六十歳にはそれなりの風采^{ふうさい}があり、七十歳には前には見られなかった風貌^{ふうぼう}が備わり、八十歳には更に風格が加わって、というように——。つまり、年齢の増加とイメージの変化は正比例する関係にあった。あの人は幾つくらいだろう、と考える時、そのイメージが手がかりとなった。

いつの頃からか当の比例関係が曖昧^{あいまい}となり、対応に狂いが生じた。年齢の輪郭が崩れ始めた。総じて日本人の寿命が延びたのだから当然だろう、との声をよく聞かされた。確かに我々の平均寿命はここ二十年ほどの間に男は四年ほど延びて七八・五年、女は五年以上も延びて八五・四九年に達した。

寿命がそれだけ延長されれば、生涯における通過点としての各年齢¹の相対的な位置関係も変らざるを得ず、以前に見られた歳相応の貫禄^{かんろく}といったものが薄れてしまうのも無理はないのかもしれない。

X を迎えるのは当り前の話であり、Y に達するのも少しも珍しくはなくなった。今の六十歳にはかつての六十歳の重みはなく、現在の七十歳には昔の七十歳の威厳

は見られないわけである。人が歳を取らなくなったとは、そのことを指しているに違いない。良くいえば元気な高齢者が多くなったのであり、悪くいえば老熟した年寄りが見かけられなくなった。この現状認識には頷く他にない。

寿命が延びてかつての年齢に備わっていたそれなりの風格というものが見られなくなったのは認めるとしても、では先に進めば幾年か遅れてその風格に辿り着くことが出来るのであろうか、との疑問が残る。老熟は単に先延ばしにされているに過ぎず、遅れるとしてもいつかは以前と同じものを人が手に入れることが出来るのであろうか。たとえば現在の七十歳はかつての六十歳に換算が可能であり、もし昔の七十歳を目指すとするれば今は八十歳まで待たねばならない、などといった計算が成り立つのかどうか。

そうではないだろう。これは年齢を数字として扱う計算上の問題ではなく、生きることの質²に関する事柄であると思われる。

以前の年齢が備えていた老熟の風格といったものには、幾ら歳を重ねても我々はもう追いつけない。というより、そんなものはとうに失われてしまっている。ここ半世紀ほどの我々の生き方が、なし崩しに昔の老人像を蝕み、崩壊に導いていたのかもしれない。その過程には家族の在り方や相続の問題、医療技術の発達など、様々の要因が絡まり合っている。

と考えると、年齢の輪郭が曖昧になったり、老年にふさわしい威厳が薄れたりするのは必然であり、最近になって急にそのことが意識されるようになったのだ、と受け取るのが正しいような気がする。人が歳を取らなくなったのではなく、人は以前のように歳を取れなくなっていると認識すべきなのだろう。年齢にまつわる古いイメージが失われ、より長くなった寿命に関する新しいイメージが生み出される前の端境期^{はざかいき}に我々は立たされているに違いない。自分の年齢をいかなる老いの形に流し込めばよいのかがわからぬ戸惑いが、歳を取れぬ状態へと人を追い込んでいる。とりあえずの応急処置とでもいうかのように、幾つになっても元気で若々しい老人の姿のもてはやされる傾向が見られるが、それだけで老いの確かなイメージが成立するとは思えない。体力の維持や健康は老年に必要なものではあるだろうが、それに支えられた生の内容がどのような形で暮しの中に現れるかが問われぬ限り、年齢にふさわしい老いの姿を思い描くことはかなわない。

人が歳を取れなくなってしまったことは我々の必然ではあるのだが、それを喜んだりそれに困惑するのではなく、その事態³

を一つの可能性として捉え、そこから新しい年齢イメージの構築へと歩み出せぬものか、と老いの中で夢みている。

(黒井千次「歳を取れなくなった時代」)

(注) ○ 我々の平均寿命……本文中の数値は、厚生労働省発表の「平成17年簡易生命表」による。

問一 傍線部 a ~ c の漢字の読みを、ひらがなで答えよ。

問二 空欄 X には「六十歳」のことを表す言葉が、Y には「七十歳」のことを表す言葉が入る。各空欄に入れるのに

最も適当な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 還暦 イ 不惑 ウ 喜寿 エ 古稀 オ 米寿

問三 次の一文は、もともと本文中のある段落の冒頭にあつたものである。もとに戻すとしたら、どこに入れるのが最も適当か。挿入箇所の直後の五字（句読点や記号も字数に含む）を答えよ。

しかし、問題はその先にある。

問四 傍線部1「各年齢の相対的な位置関係」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 現代の日本人の寿命が、かつての日本人の寿命と比べてどれくらい延びたのかということ。
- イ 誕生から死に至る人の一生のなかで、ある年齢がどのあたりに位置するのかということ。
- ウ ある年齢の人が、同じ年齢の昔の人と比べて、どれくらい風格を備えているかということ。
- エ 現在の高齢者がかつての高齢者のような貫禄を身につけるには、どれほどの歳月が必要かということ。
- オ 高齢に達し風格を備えた人が、若かった頃の状態と比較してどれくらい円熟しているかということ。

問五 傍線部2「生きることの質に関する事柄である」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 帰属する時代や社会の価値観や技術水準を前提に営まれる、生のあり方にかかわる問題だということ。
- イ 数値としての年齢の高低ではなく、健康で充実した毎日を過ごせるかどうかの問題だということ。
- ウ 高齢に達した後の人生が一生涯のなかでどのような意味や価値をもつのかという問題だということ。
- エ 老熟の風格を身につけながらできるだけ長く生きるにはどうすればいいかということが問題だということ。
- オ 生物学的な加齢がその人の日常生活にどのような影響を与えているのかという問題だということ。

問六 傍線部3「その事態を一つの可能性として捉え、そこから新しい年齢イメージの構築へと歩み出せぬのか」とあるが、筆者がこのように言うのは、現代人がある時代状況に置かれているという認識があるからである。では、それはどのような状況か。それが言い表されている最も適当な一文を本文中から選び、その最初の五字（句読点や記号も字数に含む）を答えよ。

問七 波線部「人が歳を取らなくなってしまった」とあるが、それはどういうことか。本文全体の趣旨を踏まえて、七十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問八 筆者の考えに合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 三歳の子供が六歳になったからといって、その子供が歳を取ったとは誰も言わないが、それは、三年という年月の経過があまりにも短いからだと考えられる。

イ 近年、自らが老人であるという事実を受け容れられない高齢者が増えていることも問題だが、それ以上に大きな問題は、ほとんどの人々がそうした高齢者の現状に気づかないことであろう。

ウ 現代の日本では人の平均寿命が延びており、そうした状況下で元気な高齢者が増えていることを指摘する声もよく聞かれるが、それは現状認識として正しいものとはいえない。

エ いつまでも若々しい老人の姿がもてはやされる風潮の背後には、どのように老いを迎えばよいかわからない困惑をとりつくりおうとしている現代人のありようが見えるように思う。

オ 歳を取ることの意味がきわめてわかりにくくなっている今日、我々には、あらためて原点に戻り、年齢を数字として捉えなおすという姿勢が求められている。

国語の問題は次の頁へ続く。

【共通】

次の文章は、『平治物語』の一節で、平家に捕えられた源頼朝（兵衛佐）が、平清盛の継母池の禪尼の嘆願により、伊豆国に流されることになった場面である。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

永暦元年三月二十日の晩、六波羅池殿を出で、東路はるかにおもむきけり。供の者どもあまたありけれども、ここにては履物つくろひ、かしこにては人に物言ひなどせしほに、まことに従ひつく者は三、四人には過ぎず。頼頼源五盛康ばかりぞ、旅装束さる体にて、大津までとて供しける。兵衛佐、「いくらも見えつる者どもは、何とて見えぬぞ」とのたまへば、盛康、「遼遠の境へ下り候へば、あるいは妻子、あるいは父母の名残を惜しみてぞ、遅く参り候ふらむ」と申しけれども、その後はつひに見えず。

皆人は流さるるを嘆けども、兵衛佐はよろこびけり。ことわりかな、斬らるべき身が流さるれば。されども、都の名残、せむかたなし。所々に馬をひかへ、しきりに跡をぞかへり見ける。内の藏人にもありしかば、雲上のまじはりも思ひ出で給ふ。皇后宮の宮司にてもありしかば、その名残も忘れず。「父にも母にもよしみおはせぬ池殿に、助けられ奉る。心ざしあつく思ふかき人をも、今は見奉らむこと、ありがたし」と思ひつづけて、敵陣の六波羅さへ、名残惜しくぞ思はれける。胡馬北風に嘶え、越鳥南枝に巢をかくる。畜類の心なきだにも、故郷はしのぶ心あり。東平王といひし人、旅にてはなくなりしかば、その塚の上なる草木も、故郷の方へぞなびきける。遊子は神となりて、巷を過ぐる人をまもり、杜宇は鳥となりて、旅なる者を帰れと鳴く。これらは長途に命を落とし、他郷に屍をとどめしが、望郷の魂うかれて外土の恨みをあらはしたぐひなり。兵衛佐が心も、さこそとおぼえてあはれなり。

追立の使は、青侍季通なり。栗田口辺より、路次にてあふ者をば、物を奪ひ取る。兵衛佐、「かうなせられそ。頼朝下向の時、路次に狼藉ありけりと聞こえむこと穏便ならず」とぞ制しける。頼頼源五、「いづくまでも御供申すべく候ふが、八旬にあまりたる老母、今日とも、明日とも知らぬ身にて候へば、盛康に別るべきことをあまりに嘆き申し候ふ。この老尼、いかにも

なり候ひなば、いそぎまかり下りて、奉公申すべく候ふ」と申し、「せめて勢多まで」とて供しけり。

(注)

1 六波羅……平氏一門の邸宅が多くあったところ。現在の京都市東山区の松原通の辺り。

2 池殿……池の禪尼の邸宅。

3 遼遠の境……遠く離れた土地。

4 胡馬北風に嘶え、越鳥南枝に巢をかくる……中国六朝時代の詩集『玉台新詠』に収める詩の一節。「北の胡国から来た馬は北風にいななき、南の越国から来た鳥は南に伸びた枝に巢を作る」の意。

5 東平王……中国漢の宣帝の子、劉宇。東平国を与えられ、その地で死んだ。

6 遊子……中国古代の王・黄帝の子。旅を好み、旅中に死んで、道祖神になったと伝えられる。

7 杜宇……中国古代の蜀王望帝。讓位後に国を去り、死んでホトトギスになったと伝えられる。

8 外土……都から遠く離れた土地。

9 八旬……八十歳。

問一 傍線部1「いくらも見えつる者どもは、何とて見えぬぞ」とあるが、頼朝はどういうことを不審に思って、このように述べたのか。本文に即して三十字以内(句読点等を含む)で説明せよ。

問二 二重傍線部a、fの助動詞の文法的意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

(同じ記号をくり返し用いてもよい。)

ア	自発	イ	可能	ウ	受身	エ	尊敬	オ	打消
カ	過去	キ	完了	ク	推量	ケ	現在推量	コ	過去推量
サ	推定	シ	断定						

問三 傍線部2「よろこびけり」とあるが、頼朝はなぜ喜んだのか。本文に即して三十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部3・4・5の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

3 「せむかたなし」

ア 信じられない イ 思い出せない ウ 引き返せない エ 押さえられない

4 「雲上」

ア 都 イ 六波羅 ウ 宮中 エ 旅先

5 「ありがたし」

ア うれしい イ むずかしい ウ 残念だ エ 迷惑だ

問五 傍線部6「兵衛佐が心も、さこそとおぼえてあはれなり」は、頼朝に対する語り手のどのような気持ちを表現しているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 故郷をさぞかし懐かしく思うことだろうと同情している。

イ 死後は神となり旅人をしっかり守ってほしいと祈っている。

ウ 早く都に戻ってきてほしいものだと思つて遠く思っている。

エ 旅の孤独に堪えられず死ぬかもしれないと危惧している。

問六 傍線部7「いかにもなり」とはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 老母に孝行すること。

イ 老母が長生きすること。

ウ 老母をなぐさめること。

エ 老母が亡くなること。

【現・古・漢型】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合で、返り点・送り仮名を省略したところがある。)(配点 四十点)

南^ナ齊^シ曲^ク江^カ公^{コウ}蕭^{セウ}遙^{エウ}欣^{キン}、少^ア有^{クシテ}神^リ采^{シン}幹^{サイ}局^ク。為^リ童^ニ子^シ時^{トキ}、有¹一^ニ小^コ兒^ニ左^サ右^ウ彈^{ダン}

飛^ヒ鳥^ニ。未^ミ嘗^{シヤウ}不^フ應^{オウ}弦^{ゲン}而^ニ下^カ。遙^{エウ}欣^{キン}謂^{ヒテ}之^ニ曰^ク、「凡³戲^{オホソ}多^タ端^{ハムレ}、何^{ナニ}急^{キウ}彈^{ダン}此^{コノ}。鳥^{トリ}自^{ヨリ}雲

中^{ナカ}翔^{トフハ}、何^{ナニ}関^{カハ}人^ニ事^{シヤウ}。」小^コ兒^ニ感^{ジン}之^ニ、終^{シュウ}身^ニ不^フ復^タ捉^{トラ}彈^ヲ。爾^{ソノ}時^{トキ}年^{ナヒ}十^{ジュウ}一^ニ。士^シ庶^ニ多^ク

競^{ケイ}此^{コノ}戲^シ。遙^{エウ}欣^{キン}一^ニ說^ハ、旬^{ニシテ}月^{シキ}播^ヲ之^ニ、遠^{エン}近^{キン}聞^ク者^ヲ、不^フ復^タ為^サ之^ヲ。

〔八代談藪〕による

〔注〕○南齊曲江公蕭遙欣……「南齊」は南朝の齊王朝(四七九―五〇二)。「蕭遙欣」は人名。「曲江公」は蕭遙欣の称号。

○有神采幹局……容貌も物事を処理する能力もすぐれていること。

○彈……はじき弓で撃つ。また、はじき弓。

○士庶……人々。

○旬月播之……まもなく人々の間に広まる。

問一 波線部 a 「少」・ b 「為」・ c 「復」の読みを、平仮名で記せ。

問二 傍線部 1 「有一小兒左右彈飛鳥」は「一小兒の左右に飛鳥を弾つもの有り」と読む。この読み方に従って、解

答欄の原文に返り点を施せ。(送り仮名は不要。)

問三 傍線部2「未^ミ嘗^シ不^レ応^レ弦^ヲ而下^ニ」を書き下し文に改めよ。ただし、「下」は「落ちる」の意味で、「おつ」（終止形）と読む。

問四 傍線部3「凡^レ戲^ヲ多^ク端^ニ、何^レ急^ニ彈^レ此^ヲ」とあるが、どういうことを言おうとしているのか。最も適當なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 遊びは色々あるのに、わざわざ鳥を撃つことなどないではないか。

イ たとえ遊びだとしても、どうしていきなり私を撃とうとするのか。

ウ ありふれた遊びに飽きたとはいえ、何も鳥まで撃つことはないだろう。

エ これほど楽しい遊びはないのだから、すぐに弾^{たま}を用意してこい。

オ たくさんの鳥と楽しく遊んでいたのに、突然撃ち落とすとは何事か。

問五 傍線部4「何^ニ関^ス人事^ニ」を現代語訳せよ。

問六 傍線部5「終身」の「終」と同じ意味の「終」を含む熟語として最も適當なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 最終 イ 終点 ウ 終日 エ 終結 オ 有終

問七 傍線部6「遠近聞者、不復為之」とあるが、なぜか。その理由として最も適當なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 幼い子どもとはいえ身分の高い蕭遙欣の言葉を無視するわけにはいかなかったから。
- イ 蕭遙欣の言葉から人の都合で他の生き物の領分を侵してはならないと納得したから。
- ウ はじき弓で鳥や人を撃つ以外に面白い遊びなどないと蕭遙欣の言葉で知ったから。
- エ 自由に空を飛ぶ鳥にあこがれる蕭遙欣の言葉を聞いて人の世に嫌気がさしたから。
- オ 蕭遙欣の言葉の通り鳥もはじき弓の弾に慣れてしまい当てるのが難しくなったから。

国語の問題は次の頁へ続く。

【五】【現・古型】

次の文章は『古本説話集』の一節である。ある僧（こほん）が、山に籠り厳しい修行をして過すうちに小さな仏像を授かる。それに続くのが以下の文章である。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 四十点）

そこに小さき堂を建てて据ゑ奉りて、えもいはず行ひて年月を経るほどに、山里に下衆人（注）げすとて、いみじき徳人（注）ありけり。そこに、僧の鉢（注）は常に飛び行きつつ、物は入りて来けり。大きな校倉（注）あぜくらのあるを開けて物取り出でさするほどに、この鉢飛びて例の物乞ひに來たりけるを、「例の鉢來にたり。ゆゆしくふくつけき鉢よ」とて、取りて倉の隅に投げ置きて、とみに物も入れざりければ、鉢は待ちゐたりけるほどに、物どもしたため果てて、この鉢を忘れて、物も入れず取りも出で、倉の戸を鎖（注）さして、主歸りぬるほどに、とばかりありて、この倉、すすろにゆさゆさと揺るぐ。「いかにいかに」と見騒ぐほどに、揺るぎ揺るぎして、土より一尺ばかり揺るぎ上がるときに、「こはいかなることぞ」とあやしがり騒ぐ。「まことまこと、ありつる鉢を忘れて、取り出でずなりぬる。それが故にや」など言ふほどに、この鉢、倉より漏り出でて、この鉢に倉乗りて、ただ上りに空さまに一二丈ばかり上る。さて飛び上るほどに、人々見のしり、あさみ、騒ぎ合ひたり。倉主も、さらにすべきやうもなければ、「この倉の行かむ所を見む」とて、後に立ちて行く。そのわたりの人々みな行きけり。さて見れば、やうやう飛びて、河内の国に、この聖の行ふ傍らに、どうと落ちぬ。

いといとあさましと思ひて、さりとてあるべきならねば、聖のもとに、この倉主寄りて申すやう、「かかるあさましきことなむ候ふ。この鉢の常にまうで来れば、物入れつつ参らするを、今日、まぎらはしく候ひつるほどに、倉に置きて、忘れて、取りも出で、錠を鎖して候ひければ、倉、ただ揺るぎに揺るぎて、ここになむ飛びてまうで来て、落ち立ちて候ふ。この倉返し給はり候はむ」と申すときに、「まことにあやしきことなれど、さ飛びて來にければ、倉はえ返し取らせじ。ここにもかやうの物もなきに、おのづからさやうの物も置かむ。よしよし、中ならむ物はさながら取れ」とのたまへば、主の言ふやう、「いかにしてか、たちまちには運び取り候ふべからむ。物千石積みて候ひつるなり」と言へば、「それはいとやすきことなり。たしか

に我運びて取らせむ」とて、この鉢に米一俵を入れて飛ばすれば、雁などの続きたるやうに、残りの米ども続きたり。群雀^{むらすめ}などのやうに飛び続きたるを見るに、いといとあさましく、たふとければ、主の言ふやう、「しばし。皆な遣はしそ。米二三⁷百は留めて使はせ給へ」と言へば、聖、「あるまじきことなり。それここに置きては何にかせむ」と言へば、「さは、ただ使はせ給ふばかり、十二十をも」と言へど、⁸「さまでも、要るべきことのあらばこそ留めめ」とて、主の家にたしかにみな落ちるにけり。

(注) 1 下衆人……身分の低い人。 2 鉢……食器。僧はこれを持って托鉢^{たくはつ}してまわる。 3 ふくつけき……欲が深い。

4 一尺……「尺」は長さの単位。「一尺」は約三十センチメートル。 5 一二丈……「丈」は長さの単位。「二丈」は約三メートル。

6 河内の国……現在の大府東部。 7 千石……「石」は容積の単位。「一石」は約百八十リットル。

問一 傍線部1「徳人」は、本文を踏まえるとどのような人と判断できるか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 仏に帰依する人 イ 人格のすぐれた人 ウ 裕福な人 エ 権勢^{けんせう}を揮う人

問二 傍線部2・3・4の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

2 「とみに」

ア あわてて イ いつまでも ウ 少しも エ すぐに

3 「すずろに」

ア 突然 イ 思いがけず ウ 決まって エ 静かに

4 「さらに」

ア まったく イ 今となつては ウ その上 エ どうにも

問三 傍線部5「かかるあさましきこと」とあるが、どのようなことか。本文に即して、三十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部6「倉はえ返し取らせじ」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 倉をお返しするつもりはまったくない
イ 倉をお返しすることはできないだろう
ウ 倉はどうしたらお返しできるのだろう
エ 倉はいずれおのずと返っていくだろう

問五 傍線部7「しばし。皆な遣はしそ。米二三百は留めて使はせ給へ」という倉の持主の発言は、どのような気持ちから発せられたものと考えられるか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 一度は倉ごと山上まで運ばれてしまった米を、聖が再び山里に運び返してくれることに対して感謝する気持ち。
イ 鉢を飛ばして食物を得るばかりか、意のままに鉢を使役する聖の験力を目の当たり^{*}にして畏敬の念を抱く気持ち。
ウ 米俵の積んである倉を乗せて空を飛んだり米俵を自在に操ったりする鉢に、不気味な靈力を感じる気持ち。
エ 托鉢に飛んで来る鉢を粗末に扱ったことがもとで倉を運ばれたと思い、仏罰を恐ろしく思う気持ち。

問六 傍線部 8 「さまでも、要るべきことのあらばこそ留めめ」から読み取れる聖の人物像として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 律儀で人当たりのよい僧
- イ 智略に人一倍長けた僧
- ウ 強欲なところのない僧
- エ 慈悲深さに満ちた僧

